

幼児教育専攻学生における幼稚園の養護教諭に対する意識

D07-4012 森内 由佳

指導教員 朝倉 隆司

キーワード：幼児教育専攻学生、養護教諭、幼稚園

1. はじめに

幼児期は、身体的な発達の基礎がつくられはじめ、運動機能が急速に発達する時期である。また、生活習慣病などの低年齢化がいわれている今日においては、幼児期の段階から保健教育を推進し、健康に対する意識を育てていくことが重要である。しかしながら、幼稚園において、保健管理の専門職である養護教諭の必置は義務付けられていないため、幼稚園に配置されている養護教諭は他校種に比べて非常に少なく、その活動や役割についてはほとんど知られていない。

そこで本研究では、将来の幼稚園教諭になる可能性がある幼児教育専攻の学生が、幼稚園における養護教諭に対してどのような意識を持っているか明らかにすること、養護教諭に対する意識と関連する要因を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

T大学とA短期大学の学生245名に対して自記式質問紙調査を実施した。回収数は217（回収率88.5%）で、その全てが有効回答であった。調査期間は2010年11月である。調査項目は、基本的属性、幼稚園教諭としての意識、大学生活における幼稚園に関わる経験、幼稚園の養護教諭に関する知識と経験、幼稚園の養護教諭に対する意識、養護教諭への期待度である。

3. 結果と考察

養護教諭は必要か、養護教諭と共に働きたいか、養護教諭と協力して保健活動を行いたいかという養護教諭との協働に関する意識では、いずれの間にも8割以上が「とても思う」「まあまあ思う」と回答し、幼児教育専攻の学生の多くは幼稚園においても養護教諭が必要だと感じていた。しかし、幼稚園教諭として勤務する際に「保健指導」や「応急手当」に困ったとき、誰に相談したいかという現実的な場面を想定した間に対しては、「保健指導」では、先輩の幼稚園教諭52.9%、養護教諭43.7%、「応急手当」では先輩の幼稚園教諭40.3%、養護教諭53.9%と、いずれも「先輩の幼稚園教諭」と「養護教諭」に二極化していた。そこで、相談相手として先輩の幼稚園教諭と養護教諭が二極化した背景にはどのような要因があるのか明らかにするため、「保健指導の相談相手」「応急手当の相談相手」と、基本的属性4項目、幼稚園教諭としての意識に関する7項目、幼稚園の養護教諭に関する知識や経験6項目との間で関連性を検討するために χ^2 検定を行った。その結果、「保健指導の相談相手」「応急手当の相談相手」ともに、所属、実習・ボランティア先の養護教諭配置の有無、養護教諭から保健活動や職務について話を聞いた経験の有無、養護教諭の大切さを実感した経験の有無、幼稚園への養護教諭配置の知識との間で有意な関連が見られた。幼稚園教諭としての意識に関する7項目では有意な関連は見られなかった。所属については、四年制大学に通う学生の方が、養護教諭に相談したいと考えている者の割合が大きかった。これは四年制大学では附属の幼稚園があるため、実習の際に養護教諭と接する経験や養護教諭についての知識が自然と多いことが関係していると考えられる。また、実習やボランティア先に養護教諭がいた人、養護教諭からの話を聞いたことがある人、養護教諭の大切さを実感したことがある人、幼稚園への養護教諭配置が可能なことを知っている人のほうが、有意に養護教諭を相談相手として選択することがわかった。養護教諭がどのような役割や職務を担っているのか、実際の現場で見聞きするなどの経験が、幼児教育専攻学生の養護教諭に関する意識に影響を与えていることが示唆された。

4. 結論

幼児教育専攻学生の、養護教諭に対する協働意識は非常に高いことがわかった。また、養護教諭に対する意識に影響を与えている要因としては、学生が幼稚園の養護教諭と実際に接する環境があるかどうかが大きく関わっていることが示された。